

AFC フォーラム Forum

Agriculture, Forestry, Fisheries, Food Business and Consumers

1

2018

特集 農業ニューウェイブ時代



特集

農業ニューウェイブ時代

3 生産者と消費者が支え合う農業・CSA

波多野 豪

天候不順などによって収穫がないリスクも、生産者と消費者双方が分かち合うCSA。各国の提携形態を紹介しつつ、これからの有機農業の在り方を識者が語る

7 エシカルなスタイルと農業の新時代

山口 真奈美

環境保全や社会問題に配慮するエシカル。農林水産業とエシカルがいかに身近で、人々の暮らしを支えているのか、今が伝える大きなチャンスである

11 顧客獲得にクラウドファンディングも

柏木 智帆

クラウドファンディングは、資金調達と使い方によっては顧客獲得の可能性もある。実践者への取材で見えてきた課題を考える

変革は人にありシリーズ100回企画

31 新春 特別座談会／日本農業の力こぶ 新しい酒を古い草袋に入れるな！

時代をどう捉え、どのような戦略を描くのか——。旧来の常識に挑戦し業界や地域に変革をもたらしてきたフロントランナーによる議論の中で、日本農業の成長に必要なものが見えてきた

特別企画

15 平成29年度アグリフードEXPO輝く経営大賞(西日本エリア) ～駆け上がる地域農業の担い手たち～

農事組合法人秋香園／福岡県

経営紹介

経営紹介

23 有限会社見元園芸／高知県 見元 一夫

花卉がウサギのようなビオラ、ハート型のクローバーなど個性的な品種群が多くの人を驚かす。苦節を乗り越え、新品種開発の育種に成功

*本誌掲載文のうち、意見にわたる部分は、筆者個人の見解です。



撮影:高橋 良典

奈良県明日香村
2011年初春撮影

朝日の稲渕棚田、雪景

■朝日が昇る。凍寒の棚田に光と暖かさが満ちていく■

シリーズ・その他

観天望気

0.75%の水 丹羽 宇一郎 2

農と食の邂逅

住 珠紀／愛知県

青山 浩子(文) 河野 千年(撮影) 19

フォーラムエッセイ

タッパーの嫁 エプロンの嫁 今井 雅子 22

インフォメーション

農業・林業・水産業

経営アドバイザーシンポジウム開催 情報企画部 25

耳よりな話 189回

南からの厄介な訪問者 —アルボウィルス—

吉原 一浩 26

まちづくりむらづくり

ビジネスプランコンテストを通じた

起業が連鎖するコミュニティーづくり

NPO法人てごねっと石見／島根県江津市

本宮 理恵 27

書評

岩間 信之 編著

『都市のフードデザート問題

ソーシャル・キャピタルの低下が招く街なかの「食の砂漠」』

村田 泰夫 30

みんなの広場・編集後記 37

ご案内

第11回アグリフードEXPO大阪2018 38

2月号予告

木材のバリューチェーンをいかに築くか、を特集予定。資源が蓄積し国産材ブームといわれる一方、木材価格低迷で再生林を行うためのコスト負担ができないという声もある林業界。川上から川下までの連携によるバリューチェーン構築が打開策となるか。

望天 観気

0.75%の水

四〇年程前、私は毎年のように「世界のブレッド・バスケット」と言われるアメリカ中西部三八〇〇キロメートルを一週間かけて穀物生育の定点観測したり、南米やアジアなど世界各国の農業を見て回ったりしていた。いつも日本の行く末と農業への想いが心の底流にあったからである。世界最大、一流の農業の姿を心に焼き付けておきたかったのだ。どの国も未来永劫、農業が国の宝であることは間違いない。そうした国の村々の風景はいつも美しく、そのたびに「田畑は雑草によつて損なわれ、人は食欲によつて汚される」と言う金言が頭に浮かんだものだった。

北海道の農村に目を向ければ、大規模にもかかわらず、農作物を大切に栽培しているかが見て取れる。同様に、中国では穀倉地帯の東北三省（遼寧省・吉林省・黒竜江省）だけでなく、少数民族が多く住む西南地区の貴州省の美しい棚田、欧州では牧場、アメリカ、南米、アジアの諸国でも農村は豊かで美しい。そして、そこは決まって水を大切にしている。水を管理して農地を整備することは、すなわち国民の生活を守ることに直結し、今も昔も変わらない。

地球の九七％強は海水であり、農業、工業、生活用水など人間が使用できる淡水はわずか三％弱にすぎない。そのうち七〇％は南極や雪渓にあって、残りの三〇％、すなわち全体の〇・七五〜〇・九％が地下水として貯蔵されている。世界の食の宝庫である米国の農業生産物の四〇％は、大平原の地下、八州にまたがるオガララ帯水層より汲み上げられた灌漑用水の恩恵を受けている。この地下水層は、何と日本国土全体の一・二倍の大きさで、琵琶湖の水量の二五六倍である。一万五〇〇〇年前からの帯水だが、今では農業灌漑で一日当たり東京ドーム約三・二倍の四〇〇万立方メートルの水が使われており、水位の低下が続いている。また中国では、東北部華北平原の地下水帯も毎年一メートルずつ水位が下がっており、河北省の一〇五二あった湖は、今は八〇湖を下回っている。日本の水の管理は農林水産省、国土交通省など五省にまたがる縦割りとなっている。農業は国の宝だが、水はその農業の宝である。そしてわれわれはそれを忘れることなく、後世に伝え続けなくてはいけない。



公益社団法人日中友好協会 会長

丹羽 宇一郎

にわ ういちろう

1939年愛知県生まれ。62年名古屋大学法学部卒業。同年伊藤忠商事株式会社に入社し、主に食料部門に携わる。98年同社社長、2004年会長就任。10年6月〜12年12月中華人民共和国駐節特命全権大使。13年4月早稲田大学特命教授に就任。著書に『人を育てよ 日本を救う、唯一の処方箋』（朝日新書）、『危機を突破する力 これからの日本人のための知恵』（角川新書）、『死ぬほど読書』（幻冬舎新書）など多数。

農業のきっかけは
東日本大震災でした
食べ物はどんなのだろう
やっぱり、農業をしよう
その年会社を辞めました

農と食
の邂逅

住珠紀さん

愛知県瀬戸市
すみ農園 代表

農地探しを始め、栽培と経営の基礎は農業者
大学校に入学して学び、営農資金は自ら周旋
し、融資を決めた。サラリーマン家庭に育ち、会
社勤めの生活環境から、新規就農者に転身し
た女性農業経営者は、銜いも気負いもない。





P19: 夫の利明さんはITエンジニア。珠紀さんの就農後、「前よりも家事など手伝ってくれるようになりました」と言う
 P20: ハウスの面積は700㎡。大玉トマトとミニトマトを作る。注文に応じきれず、将来に向け規模拡大を検討中(右) 目下の目標はGAPの取得だ(右下) 約30aの畑ではダイコン、ハクサイ、キャベツ、ナス、サトイモやカボチャなどを作り、近隣のスーパーや直売所に出荷する(左)

私には、農業しかない

「いざれ農業をやるうと思っていましたが大きなきっかけは東日本大震災です」。四〇歳で新規に就農した住珠紀さん(四六歳)はこう話す。二〇年間の旅行会社勤務から一転し、農業の世界に足を踏み入れた。

華々しく見える旅行業界だが、かなりのハードワークだ。三〇歳代半ばを過ぎた頃から「年を取っても続けられるのはどんな仕事だろうか」と考えるようになった。時を同じくして、実母、義母の介護が始まり、自身も一時病に倒れた。生き方を見直そうという想いは強くなっていった。

二〇一二年三月の東日本大震災は「やっぱり農業しかない」と思わせるほどの影響があった。「あのような震災がまた起こったとしたら、どうなるか。助かったとしても、インフラが寸断されたら家に帰れるのか、食べ物が入るのか……と。家の近くでものづくりをしないと強く思いました」。同年、珠紀さんは会社を辞めた。

サラリーマン家庭で育った珠紀さんだが、実は農業との距離は近かった。両親が自家用の畑の一角に「専用の畑」を作ってくれ、珠紀さんはせっせと野菜を育てた。社会人になり実家を離れても、ベランダでの野菜づくりは続いていた。

就農の意を決めてからは、瀬戸市が開催する農業塾で学び、愛知県立農業大学校にも一年間通うなどし着々と就農に向け準備を進

めた。名古屋市のベッドタウンである瀬戸市では、農業を営む者の大半は自給的農家。生業として農業を営む担い手の登場を待ち望んでいた同市は、就農のために農地を探していた珠紀さんの存在を知ると、農地探し、地元との調整などで力を貸してくれた。四〇歳の農地を借りることができた二二年一〇月、ついに珠紀さんは新規就農者に。「流れに乗るように、あれよあれよと決まっていきました」

最初は、イタリア野菜など珍しい野菜を多数つくり、近隣の直売所に出荷した。「うまくいきませんでした。珍しいと言ってお客さんは手に取ってはくたさるのですが購入までは至らない。棚の飾りでした」。二年目は品目を絞り込み、ナスやハクサイなど定番の露地野菜を主にしたが、露地野菜だけで生計を立てていく難しさを感じた。「天候に左右される上、畑の耕耘、堆肥散布、畝立てといった作業は体力面できつい。収入の面でも不安がありました」

三年目、珠紀さんは露地野菜を続けながら、施設栽培への挑戦を決める。

施設栽培で経営を発展

新規就農して間もない女性が投資額の張る施設栽培に乗り出すには度胸がいる。しかし、施設園芸が盛んである愛知県という土地柄にあり、就農後も熱心に勉強を続けてきた珠紀さんにとっては、唐突な農業形態ではなかった。

自分の周りにプロ農家がない環境で、技術を高めるには「情報を自分から取りに行くしかない」と、豊橋技術科学大学に通った。同大学は日本有数の施設園芸地帯である東三河地域にある環境を活かし、IT農業や植物工場など最先端の施設園芸についての講座に力を入れている。珠紀さんは授業の一環で、



農業経営の傍ら、豊橋技術科学大学で経営管理やIT、6次化、植物工場などを学んで無事卒業。「IT食農先導士」として認定を受けた

近隣の大型施設や植物工場の視察に何度も訪れた。共に学ぶ学生の中には、すでに大規模な施設を建てて、経営をしている人たちもいた。

「ハウスの建設など投資額は張りますが、(反収が多く、安定生産できるなど)リターンも大きい」と珠紀さんは、確信を深めていっ

た。農業大学時代には、施設栽培には国の補助事業を活用できるという知識も持っていた。日本公庫から青年等就農資金を無担保で借り、国の補助金と合わせた一八〇〇万円、二〇一五年、トマト栽培施設を建てた。「家を担保に入れるなどの条件がなく、夫(利明さん)の理解も得られやすかったと思います」と珠紀さんは振り返る。

トマトは、施設内の環境制御や水の管理など、露地栽培にはない作業が求められる。初年度は病気が出たり、対策が後手に回ってしまった。それでも「年々良くなってきました。収益面も計画通りです」と話す。長く畑に接してきた経験によりセンスがあるのだろう。種苗会社の担当者からも「収穫しやすいう、目線が届く範囲内に実がそろって成っていて、きれい」と高い評価をもらっている。

トマトを作るようになって変わったことは、販路。何といってもトマトは野菜売り場の看板商品だ。近隣の大手量販店「社が声を掛けてくれ、取引が始まった。珠紀さんのコーナーを作ってくれた店もある。「以前は、いくつかの直売所を掛け持ちしていましたが、まとまって出荷できる先が生まれたのもトマトの力かな」

地元で喜ばれる野菜を

珠紀さんは今、女性のパート五人と共に農園を運営している。パートには働きたい日数、時間を本人に申告してもらい、過不足が生じれば、珠紀さん自身がカバーしたり、施設と

露地の人員配置を換えたりと工夫し対応する。決まった時間に勤務できる人を募集した方が労務管理は楽だが「私自身、仕事と介護で時間のやりくりが苦勞した経験があるので、働きやすい環境をつくりたい」と言う。

最近、瀬戸市の要請で地元の小学校で食育の授業を行い、同時に給食用にハクサイを届けた。子どもが同小学校に通っているパート従業員は、自分たちが育てたハクサイを子どもに食べてもらえて、とてもうれしそうだったという。授業を受けた子どもたちも、畑でいつも作業している珠紀さんを「知ってるよ」と言ってくれ、地産地消の魅力を感じた。今後も、食材を届けたいと考えている。

珠紀さんはあくまでも地元を営業区域と定め、他地域への販売は考えていない。瀬戸市には、三〇〜四〇歳代の夫婦や家族が多く暮らす。「ここに暮らす人たちに喜んでもらうことが一番です。私も営業などに時間をとられることなく、ものづくりに集中したい。地元で売れ続けられ、死ぬまで農業ができれば(笑)」

トマトの甘さを追求しつつも、収量とのバランスを取ることに重点を置く。収量が多ければお客さんにとって買いやすい価格になり、農園の経営も安定するからだ。冷静で明確な考え方は就農五年とは思えない。

「旅行会社時代よりハードワークで、休みもありません。でも、前よりずっと健康になりました」と珠紀さんはほほ笑む。

(青山浩子／文、河野千年／撮影)

食いしん坊ゆえ、わたしの書く脚本には、やたら食事の場面が出てくる。何を食べるか具体的に指定し、時には作る過程も描く。においや味を想像しながら書くので、おなかが空く。

NHKの連続テレビ小説「てっぱん」を書いていたときは、お好み焼きが無性に食べたくなった。しかも、ヒロインが暮らしている下宿は、料理上手な祖母の賄いつき。おなかが鳴って仕方がなかった。

正月に尾道へ里帰りしたヒロインが母と雑煮を作る場面では、母娘は調理の手を動かしながら、土地ごとに違う雑煮の味について話す。結婚したら嫁ぎ先の雑煮を作ることになるのかと想像するヒロイン。そしてたら尾道の雑煮は食べられなくなるのか。どっちも食べたいから正月の一日と二日で違う雑煮を作ると言う。

その場面で「大阪のお雑煮は白味噌なんよ」という台詞が出てくる。わたしが生まれ育った堺の家の雑煮は白味噌で丸餅だった。嫁いだ東京の家は、塩を振った鯛かほのだしのおすましで四角い餅。夫の父が育った長崎の味らしい。

雑煮以上に驚いたのは、塗りのお盆に美しく盛りつけられるお節料理。伊勢海老が鎮座し、まわりに黒豆や紅白なますや数の子や芽の出たくわいをちょよちょよと並べる。運動会のお弁当のようにお重から皿に取り分ける今井家スタイルに比べて、ずいぶん格調高い。お屠蘇とそを順番にいただいたいて「おめでとございます」とあらたまつて挨拶あいさつを交わすのも新鮮だった。

さらに思い出深いのは、夫の弟のお嫁さんが初めて来た正月のこと。彼女は手伝う意欲まんまんでエプロンを持って現れた。いつものようにおかずを持って帰る気まんまんでタッパーを持って現れたわたしとの差は一目歴然。以来、「長男の嫁はタッパーを持って来て、次男の嫁はエプロンを持って来る」と姑にからかわれることになった。

しかし、一家にエプロンの嫁が二人いると、どちらが良い嫁か張り合ってしまう。棲すみ分けができているほうがラクだし平和なのだ。しっかり嫁の座は弟嫁に譲り、わたしはちゃっかり嫁の座に納まった。

この話、ネタとしてもおいしい。いつか「タッパーの嫁とエプロンの嫁」を書いてやろうと思っている。



脚本家
今井 雅子

いまい まさこ
故郷の堺を舞台にしたオリジナル脚本映画「嘘八百」(監督・武正晴 脚本・足立紳 今井雅子 主演・中井貴一 佐々木蔵之介)が1月5日より公開。同作の小説版も手掛けるほか、絵本「わにのダンス」、小説「プレストガール! 女子高生の戦略会議」、聞き手を務めた「産婆(さんば) フジヤン〜明日を生きる力をくれる、93歳助産師一代記〜」などの著作も。

タッパーの嫁 エプロンの嫁

新展開に向けて、これからの農林水産業を考える 農業・林業・水産業経営アドバイザーシンポジウム開催

全国の経営アドバイザーや行政関係者四〇五人が、業種の垣根を超えて初めて一堂に会しました。

農業経営アドバイザー制度の創設から一二年、林業・水産業経営アドバイザー制度の創設から一〇年。それぞれが蓄積した支援ノウハウを共有し、次の一〇年に向けた取り組みを探ることを目的です。

集会の冒頭、農林水産省経営局長の大澤誠氏にごあいさついただき、基調講演では「地方創生・六次産業化文脈における経営アドバイザーの社会的役割について」をテーマにして、地域活性化に取り組み株式会社トビムシ代表取締役の竹本吉輝氏にお話しいただきました。

また、「経営アドバイザーに、今後求められること」をテーマにしたパネルディスカッションや、熟練のアドバイザー三名による経営アドバイスの事例紹介も行われました（登壇者は下段参照）。

現在、農林水産業の構造改革が進められる中、二次産業を取り巻く環境は大きく変わりつつあります。

シンポジウムでは、地域へ経営アドバイザーなどの「他者」が入り込み、ファイナンスなどを含むさまざまな手段を用いて地域や関係者を結び付けた事例や、「他者」が多様な課題に満遍なく対面し、的確なアドバイスを行うことで成果を上げた事例などが報告されました。

経営アドバイザーは、農林水産業に精通した金融・会計などの専門家としてそれぞれの地域に向き合い、個別経営だけでなく全体を見通すことが重要です。「他者目線」で事業者の側面にも注目し、関係者との連携構築により全体利益に貢献することが望まれます。

参加者からは「多面的な視点を得られる機会だった」「アドバイザーとして、自分の立ち位置を考えながら仕事をしていきたい」といった声が寄せられました。

今回のように、業種を超えたアドバイザーの連携により、農林水産業の新たな展開に結び付くことが期待されます。一〇月一九日、於：東京都千代田区（情報企画部）

「登壇者」

◆パネラー

- エンゼン栄丸水産代表 遠藤誠氏
- 株式会社柳沢林業代表取締役 原薫氏
- 株式会社necco 中尾祥子氏
- 株式会社トビムシ代表取締役 竹本吉輝氏

◆コメンテーター

- 東京財団 上席研究員 小松正之氏
- 富士大学 学長 岡田秀二氏
- 宮城大学 名誉教授 大泉一貴氏

◆事例紹介

- 株式会社結アソシエイト 代表取締役 松田 恭子氏
- 株式会社フォレストミッション 代表取締役 坪野 克彦氏
- 中小企業再生支援全国本部 顧問 藤原 敬三氏



会場全景



パネルディスカッション

アドバイザー制度の概要

農業経営アドバイザー

農業経営者に対する経営改善支援に必要なノウハウを有する人材育成を通じ、農業経営の発展に寄与することを目的に二〇〇五年創設。合格者数は、四二〇〇人を超える。

林業・水産業経営アドバイザー

林業・水産業経営の維持、発展、事業再生支援などを行うために必要な各種分野における知識、ノウハウなどを有する者を育成し、林業・水産業経営に対する支援機能を維持、拡充強化することを目的として二〇〇八年創設。合格者数は、林業経営アドバイザー六五人、水産業経営アドバイザー一五〇人。

*人数は二〇一七年二月時点

南からの厄介な訪問者
—アルボウイルス—国立研究開発法人農業・食品産業技術総合研究機構 動物衛生研究部門
九州研究拠点 研究調整監

吉原 一浩

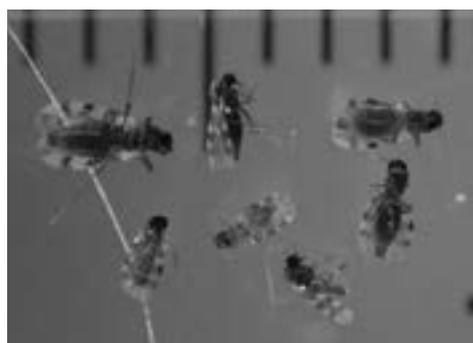
近

年、デング熱や重症熱性血小板減少症候群(SFTS)などの疾病を耳にする機会が増えたと思います。これらの疾病は、蚊やダニなどの節足動物がウイルスを人に媒介する感染症です。ウイルスは、節足動物の体内に取り込まれると増殖し、そして節足動物の吸血時に人に感染します。このように、媒介節足動物体内で増殖して人や牛などの家畜に伝播されるウイルスを総称して、アルボウイルス(節足動物媒介性ウイルス: Arthropod-borne viruses)と言います。デング熱ウイルスやSFTSウイルスのほかに、日本脳炎ウイルスや黄熱ウイルス、ウエストナイルウイルスなどもアルボウイルスの仲間になります。

家畜のアルボウイルスは、東南アジアなどからウイルスを持つて飛来する、ヌカカという体長一〜三ミリメートルの吸血昆虫によって媒介されます。アカバネウイルスやイバラキウイルス、牛流行熱ウイルスなどが牛やヌカカから分離され、それらの病原性については確認されていますが、近年はサシユペリ、シャモンダ、ピー

トシ、デアギユラといったアルボウイルスが新たに国内に侵入し、その一部は牛の異常産の原因として疑われています。

また、二〇一一年から翌年にかけて欧州でシユマレンベルクウイルスによる牛や綿羊など



ヌカカ。吸血のため腹部は赤い。目盛幅は1ミリメートル

の反芻動物の異常産が六〇〇〇件近く発生し、現在でも流行は継続しています。このシユマレンベルクウイルスは、当研究拠点の梁瀬らの研究により、シャモンダウイルスとサシユペリウイルスによる遺伝子再集合体ウイルスであることが明らかになりました。遺伝子再集合とは、一つの細胞に二種類のウイルスが感染して、両ウイルスの遺伝子を持った新しいウイルスが出現することを言います。

わが国では、アカバネウイルスやイバラキウイルスなど従来のアルボウイルスに加えて、国内新規のアルボウイルスの侵入や、シユマレンベルクウイルスのような遺伝子再集合体ウイルスの出現に注視が必要です。

そこで当研究拠点では、昆虫媒介性ウイルス実験棟を設置し、さまざまなアルボウイルスの遺伝子解析や病原性試験、診断法

の開発などを実施しています。また、ヌカカの種類や生態、それらのウイルス媒介能の研究も進めています。さらにアルボウイルス感染症の発生予察や防疫に役立つ目的で、都道府県の家畜保健衛生所などと協力してウイルス侵入の早期検出システムの確立を目指しています。

地球温暖化が危惧される現在、南方から侵入するアルボウイルスの研究を今後も精力的に実施する必要があります。

F



Profile

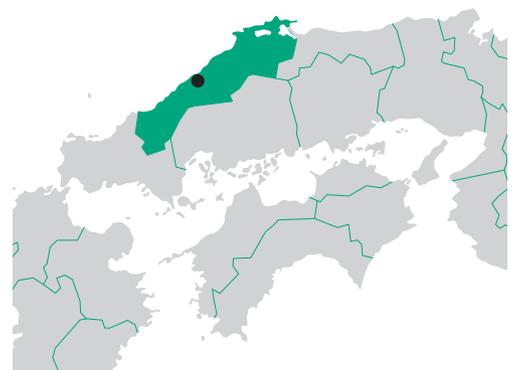
よしはら かずひろ
1961年東京都生まれ。獣医学博士。日本大学大学院修士課程獣医学研究科修了後、1987年農林水産省家畜衛生試験場入省。主に牛のマクロファージやM-CSF、ヨーネ病に関する研究に従事。2011年業務推進室長、疾病対策部長を経て17年から現職。



ビジネスプランコンテストを通じた 起業が連鎖する「コミュニティづくり」

島根県江津市

NPO法人てごねっと石見 本宮理恵



シャッター街変貌に驚きの声

私たちの活動する島根県江津市では、若者の起業が増えています。空き店舗がカフェに改装されるなど、若者のアイデアは駅前商店街に変革をもたらしました。

現在、駅前商店街に空き店舗はほとんどありません。食や買い物など、近隣の市に流れていた住民の足は商店街に向かいます。人通りが多く活気にあふれた通りの様子に、訪れた人は「以前はまさかシャッター街だったなんて信じられない」と驚くんですよ。変わったのは駅前商店街だけではありません。私が見ても地域全体に活気があふれるようになってきたと感じます。

私たち「NPO法人てごねっと石見」の事業は、若者らの創業支援をはじめ、人材育成と駅前活性化の三つを柱としています。これらの事業活動により江津市にイノベーションを起こし、地域を元気にしようと呼びかけています。

起業のアイデアは「江津市ビジネスプランコンテスト（通称：Goicon）」で募ります。江津市は急速な人口減少、伝統産業の衰退、若者の流出といった地域課題を抱えていました。そこで、江津市は「定住対策には産業振興が欠かせない」と考え、地域の課題解決につながるビジネスを掘り起こし、町ぐるみで支援しようと取り組んだのが「Goicon」なんです。

二〇一〇年に初開催され、翌年より「てごねっと石見」が中心となって、地元商工会議所、青年会議所、商工会、信用金庫、市役所の六機関で実行委員会を結成し運営をしています。仕事を自らつくれる創業人材の発掘や、若者や移住者が起業しやすい町、挑戦しやすい町を目指して産官学一体となって活動しています。「てご」とは石見地域の方言で「手伝い」のこと。「手伝いをするネットワーク」の意味で「てごねっと」と名付けたんですよ。

「Goicon」の大賞者には、江津市を拠点に、自身のユニークなプランを実現化してもらいま

す。そのための活動資金として実行委員会から一〇〇万円が支給され、さらに委員会が資金面のアドバイスや原料調達先である農家さんの紹介、PRをはじめ各種援助を行うことから、プランに本気で取り組みたいという情熱を持った方が市内外から応募してくれました。

起業しやすい町を目指す

コンテストを通じて新規創業や事業をスタートした方は、七年間で一九人（二〇一七年三月現在）に上ります。その一部をご紹介します。

市内外から二三件のプランが集まり七人が最終審査会に進んだ「第二回Goicon」では、地元食材を活用した古民家レストランを提案したUターン男性が大賞を受賞しました。翌年、彼は親戚の養蚕小屋だった古民家を利用してレストランをオープンさせました。

提供する地元で取れた無農薬野菜や魚、肉を使った料理や、休日に行う野菜や果物収穫など田

profile

本宮 理恵 もとみや りえ

1983年島根県生まれ。徳島大学在学中に、まちづくりを学び、卒業後、株式会社リクルートに入社。2010年、安来市にUターンし、団体職員となる。「第1回江津市ビジネスプランコンテスト2010」に応募し大賞を受賞。江津市に移住しNPO法人設立に携わる。現在は島根県全域に活動範囲を広げ、教育を核とした地域づくりに取り組む。

NPO法人 てごねっと石見

過疎化、若者流出など地域課題が山積する島根県江津市で、創業を目指す人や若者の挑戦を後押しする中間支援組織として2011年4月に設立。ビジネスプランコンテストを中心とする創業支援事業や、空き店舗活用などの駅前活性化事業、人材育成事業に取り組む。15年「第5回地域再生大賞」を受賞。

舎ツーリズムの体験、ピザ作りなど手づくり教室、フリーマーケットなどさまざまなイベントが評判となり、今では市外からも人が集まる人気店となるほどです。

一二年の「第三回Go-con」の大賞受賞者は、江津市出身の空間デザイナーの男性です。Uターンを機に江津市で空き家や空き店舗を使ったビジネスの展開を考えていた彼は、審査会の場で「便利な使い捨ての時代から、伝統を受け継ぎ、活かしていく時代に」と語りました。

同年には法人を設立。地域の古民家から救い出してきた古材を中心とした木材を利用して、駅前の空き店舗などのリノベーションを次々と手掛け始めました。

創業時三人だった従業員は、一六年には一〇人



上:「Go-con」で、若者が起業アイデアを熱く語る
下:活気を取り戻した駅前商店街

の組織に成長し、店舗設計、ファブリック、家具・玩具・楽器の製造などを手掛け、市内だけでなく、県外にも販路を拡大しています。

その他、一五年にはユズなど石見地域の食材を利用した地ビールの製造会社も誕生しました。いずれもオリジナリティーあふれるアイデアが実行に移されています。

情報や人が集まるハブに

「Go-con」受賞者の起業活動に引き寄せられるかのように、江津の駅前商店街の空き店舗を利用して起業したいという人々が多く集まり始めました。

そして、飲食店や学習塾、デザイン事務所や不動産業など数々の店が次々にオープンし、シャッ

ター街が一気ににぎわいを取り戻したのです。駅前商店街が変わっていく様子、そのスピードは、私たちも驚くくらいです。

このようなうれしい結果には、「てごねっと石見」の駅前活性の取り組みも大役立っていると思います。二〇一一年から一五年まで、「てごねっと石見」では駅前再生事業として、江津駅前の商店街で「手つなぎ市」という街遊びイベントを開催しました。これは、空き店舗を活用して出店者を募った企画です。商店街の飲食店が出店、マルシェでは地元産の新鮮な野菜が販売されました。ステージでは演奏やゆかたコンテストも開催され、江津市内外からの多くの人でにぎわいを生みました。

この手つなぎ市は、商店街に対しては団結力を

高めること、外に対しては江津を知ってもらわなきゃいけないという目的がありました。

また、商店会青年部に「てごねっと石見」のスタッフも加わり、一緒に趣のある喫茶店をバーに改装、人が集まる空間をつくりました。そして、手つなぎ市の継続開催だけでなく、駅前商店街の空き店舗調査を行うなど商店街の情報を把握しました。さらに、お祭りなど地域のイベントに多く参加し、ネットワークづくりに努めました。

このようにして、情報と人が集まるようになった結果、私たちがハブ的役割を果たせるようになりました。

「江津で新しく店を開きたい」「こんなアイデアがあるんだけど」といった相談が多く寄せられるようになり、飲食店やサービス業などの創業を考える経営者と空き店舗のオーナーをつなぐことも可能になりました。

江津を面白くする！

実は、私が初めて江津を訪れたのは二〇一〇年なんです。SNSで「Goon」の募集を見つけて興味を持ち、好奇心半分で足を運んだのが最初でした。江津駅を降りると、駅前には再開発工事のフェンスに囲まれており、空き店舗も多く、人通りもないさびれた印象でした。

そこで私は、第一回の「Goon」に、「大学生地域インターンシップ」という提案をしました。これは地域に関わりたい大学生を対象に地域課題を解決するインターンシップを行い、双方にとって学びがある場をつくることを目指したも

のです。商売や農業に携わる地域の方と一緒にイベントや農業体験、情報発信などに挑戦したいと考えました。

また、若者の挑戦は発信力があり、それが呼び水になります。目指す先は「挑戦する江津をつくること」だとプレゼンテーションの中で伝えました。さらに、若者と地域をつなぐ中間支援組織の必要性も提案しました。

プレゼン後、江津市役所の方から、NPO法人と一緒に立ち上げ、Goon運営をはじめとした地域づくりをしようと声を掛けてもらいました。Goonを仕掛けた江津市の担当者や、地域の人たちは「誰かのせいにするのではなく、街の未来は自分でつくるのだ」と言わんばかりの勢いで意見を交わします。江津の方々の本気さ、エネルギーはよそ者である私にとって非常に魅力的でした。家族や友人に「江津に何しに行くの？」「何があるの？」「あなたに何ができるの？」と言われましたが、「絶対、江津は面白くなる！自分はこの地域でやってみたい！」と言い返し、移住を決めました。

当初、「Goon」をNPO法人が中心となつてどのように運営していくか会議を重ねました。行政ではなくNPO法人が主体となるのは、ノウハウと人材ネットワークの蓄積を目指すためでもありました。

当初は江津市とNPOの二者で実施するイメージでした。しかし、経営支援の専門家といえば、商工会議所や商工会です。さらに、青年会議所が創業塾を単年度事業でやるという動きもありました。

挑戦する「コミュニティー」

私たちは、小さな町の中でバラバラに動くのではなく、支援する側がタッグを組んで起業希望者を支援する必要があると考えました。さらに地元金融機関にも協力を依頼しました。今では実行委員会のメンバーとして入ってもらっています。これにより、早い段階で融資も含めて相談できる体制になっています。

その地域にないことを新しく実行するとき、最初の一步は周りに理解されないことが多いものです。小さい町とはいえ、直接聞かない限り、その人の想いは分かりません。「Goon」の場合は、共に挑戦する仲間が見つかるコミュニティーとも言えます。地域の未来をつくる事業プランに対し、「一緒にやりましょう」「あの空き家は使えるよ」「あそこの社長を紹介しようか」などと、どんなつながっていきなのが江津の魅力です。

さて、今まではインターン者やUターン者の起業を応援することが多かった私たちですが、今後は、活動を広げ、元からの住民に関わっていきたくと考えています。江津を発展させるアイデアや夢を持つ個人の方々を発掘して、その実現を応援するつもりです。そのために、私たちは江津市の学校や地元根付く企業にお話を聞きに伺ったり、公共施設複合施設の運営(指定管理)に取り組みはじめました。

まだまだプレーヤーが足りない地域です。住民自らが地域の活性化に直接関わることで江津の潜在力をより高めることができると思っています。

『都市のフードデザート問題』

ソーシャル・キャピタルの低下が招く街なかの「食の砂漠」

岩間 信之 編著



(農林統計協会・2,800円 税抜)

コミュニティの希薄化が弱者生む

村田 泰夫

(ジャーナリスト)

フードデザートを直訳すれば「食の砂漠」だが、わが国では「買い物難民」とか「買い物弱者」として紹介されることが多い。過疎地で食料品店がなくなり、生鮮食料品を手に入れられないお年寄りが増えている。生鮮食料品の入手が難しい買い物弱者は、不健康な食生活に陥りやすいという深刻な問題を派生させている。

過疎地といえば、山深い農山村を思い浮かべるが、実は都会でも過疎地と同じ現象が起きている。そうした都会の「買い物弱者」の実態に焦点を当てて検証したのが本書である。

農山村の過疎地で近くに食料品店がないという問題には、自治体や集落によるさまざまな取り組みが試みられている。移動販売車が過疎の集落を回ったり、ボランティアが車で町まで買い物の送り迎えをしたりしている。

都会でも、商店街がシャッター通りになってしまつて、近くに食料品店がない地域が出てきているが、問題は「店への距離」だけではない。農山村には辛うじて残っている地域のコミュニティが、都会にはないことが問題をいつそう深刻化させている。「人と人とのつながりが希薄なことが、都会の高齢者の生活環境を悪くしている」と編著者の岩間さんは指摘する。

農山村では野菜などの自給が可能な場所もある。隣近所の人たちが食べ物をお裾分けする慣習が残っている集落もあつて、まだまだと言える。だが、都会で野菜の自給は難しく健全な食生活の維持すら厳しい。

都会のフードデザート問題は、食料の入手困難さととどまらず、地域コミュニティの不在で、人々が社会から孤立した存在になっていることも問題を複雑化させている。まっとうな最低限の生活すら営むことができず、孤独死するお年寄りが絶えないのは、なんとも悲しい。

地方都市だけでなく東京の郊外にある大規模団地でも高齢者ばかりが残され、社会的弱者の集団を形成しているところもある。欧米でも問題視され、米国の都会のフードデザート地域では、食事をジャンクフードに頼る人が多く、不健康な肥満が深刻化している。フードデザート問題は社会のひずみの表れであるのだ。

本書の特徴は、事例研究が豊富に載っていることだ。東京都港区や県庁所在地である地方都市の事例は興味深く、労作である。

読まれています 三省堂書店農林水産省売店 (2017年11月1日~11月30日・税抜)

タイトル	著者	出版社	定価
1 図解 知識ゼロからの現代漁業入門	濱田 武士/監修	家の光協会	1,600円
2 農業のマーケティング教科書 食と農のおいしいつなぎかた	岩崎 邦彦/著	日本経済新聞出版社	1,600円
3 事例でわかる漁業法と漁業権の課題	小松 正之、有蘭 眞琴/著	成山堂書店	3,800円
4 亡国の漁業権開放 協同組合と資源・地域・国境の崩壊	鈴木 宣弘/著	筑波書房	750円
5 改訂版 解説 森林法	森林・林業基本政策研究会/編著	大成出版社	4,700円
6 林ヲ営ム 木の価値を高める技術と経営	赤堀 楠雄/著	農山漁村文化協会	2,000円
7 荒くれ漁師をたばねる力	坪内 知佳/著	朝日新聞出版	1,400円
8 全国棚田ガイド TANADAS	中島 峰広/監修、 NPO法人棚田ネットワーク/編	家の光協会	2,500円
9 農業競争力の強化とは何か 農業と経済2017年10月号増刊	「農業と経済」編集委員会/編	昭和堂	1,700円
10 ルポ 農業新時代	読売新聞経済部/著	中央公論新社	860円

みんなの広場

ふるさとの田んぼと水子ども絵画展2017

昨年、二月一〇日に全国土地改良事業団体連合会主催「ふるさと田んぼと水子ども絵画展2017」授賞式が開催されました。

この絵画展は子どもたちに田んぼやため池など水の循環と環境保



明仁くんご家族。姉の明佳さんは「全米販ごはん彩々賞」を受賞。右端は賞状を授与した情報企画部長の嶋谷

険」の頭文字を取った3K職種といわれた農業ですが、ここへ来て、ICT(情報通信技術)、AI(人工知能)、IoT(モノのインターネット)などの活用先として大注目されています。

一月号の特集「スマート農業世代の宿題」は、その現状がよく分かる記事ばかりで、とても刺激的で勉強になりました。これからも、このような最先端の話題を提供してく

全の機能への理解を促し、子どもたちのまなざしを皆さまへ届けることを目的としています。

日本公庫農林水産事業本部長賞は柳明仁くん(鹿児島県徳之島町立亀津小学校二年)が受賞しました。受賞作品「とくのしまの田んぼみち」は、闘牛の盛んな徳之島の田んぼ道で出会った躍動感あふれる牛の姿がダイナミックに描かれています。

明仁くんは「引越してきた徳之島では、普通の道に牛が歩いていることにびっくりした」そうです。

受賞作品は本誌の裏表紙に掲載しています。(情報企画部)

ださい。期待しています。

(東京都府中市 丸井智敬)

みんなの広場へのご意見募集

本誌への感想や農林漁業の発展に向けたご意見などを同封の読者アンケートにてお寄せください。「みんなの広場」に掲載します。二〇〇字程度ですが、誌面の都合上、編集させていただくことがあります。

「郵送およびFAX先」

〒000-0000

東京都千代田区大手町一丁目一四

大手町フィナンシャルシティノースタワー

日本政策金融公庫 農林水産事業本部

AFCフォーラム編集部

FAX 03-3133-7011/3500

編集後記

④ 本号特集に並んだ言葉は耳慣れない言葉かもしれません。情報通信技術の発達で消費者は農業の情報が入手しやすくなり、知ることによって応援したくなることもあるでしょう。小さくても持続可能な農業を行うには、生産と消費が近いわが国の特性を活かしてファンをつくることも大切です。本年もよろしくお願いいたします。(嶋貴)

④ 果敢に変革を遂げてきた四人の参加者による新春座談会をお届けします。「日本農業の成長には何が必要か」。その答えを探ろうと、予定終了時刻を大幅に過ぎるほど議論は白熱しました。複数のキーワードが導き出されましたが、「農村には大きな価値があり、チャンスは足元にある」という言葉が一番印象的でした。ぜひ、一読ください。(城間)

④ 一家にエプロンの嫁は二人はいらないとの、「フォーラムエッセイ」の今井さまの考えに大賛成です。私も結婚前、夫の実家に向かう際、勇んでエプロンを持参しましたが、義母の「大丈夫よ」のひと言でエプロンをしたまま、ちんまりと食卓へ。そして、ちゃっかり手料理を持ち帰りました。わが家で嫁は私一人ですが、タッパーの嫁になりました。(小形)

④ 「経営紹介」見元園芸のWebサイトの商品紹介ページを開くと、それぞれの苗名に「驚愕」「ルビーの散歩道」「春るる」「小悪魔のプワリ」など、「野うさぎミモ」を凌ぐ印象的な名前がずらりと並び、独自の見元ビオラワールドが展開されています。良いものを世に拡散するにはネーミングも肝要なのだなど改めて感心した次第です。(前島)

AFCフォーラム Forum

編集

嶋谷 元 嶋貴 伸二 清村 真仁
中田 さと美 柴崎 勇太 城間 綾子
小形 正枝 前島 幸子

編集協力

青木 宏高 牧野 義司

発行

(株)日本政策金融公庫 農林水産事業本部
Tel. 03(3270)2268
Fax. 03(3270)2350
E-mail anjoho@jfc.go.jp
ホームページ https://www.jfc.go.jp/

印刷 凸版印刷株式会社

販売

株式会社日本食糧新聞社
〒105-0003 東京都港区西新橋2-21-2
第一南桜ビル
Tel. 03(3432)2927
Fax. 03(3578)9432
ホームページ
http://info.nissyoku.co.jp/koudoku/
お問い合わせフォーム
http://info.nissyoku.co.jp/modules/form_mail/

定価 514円(税込)

④ ご意見、ご提案をお待ちしております。

④ 巻末の児童画は全国土地改良事業団体連合会主催の「ふるさとの田んぼと水」子ども絵画展の入賞作品です。

国産にこだわり
農と食
をつなぎます。

第11回 **アグリフード EXPO** 大阪 2018
プロ農業者たちの国産農産物・展示商談会

日時

2月21日(水) / 22日(木)
10:00~17:00 10:00~16:00

主催



日本政策金融公庫

会場

ATC アジア太平洋トレードセンター



農業ニューウェイブ時代



『とくのしまの田んぼみち』柳 明仁 鹿児島県徳之島町立亀津小学校
〔ふるさとの田んぼと水〕子ども絵画展2017 日本政策金融公庫 農林水産事業本部長賞 受賞作品)

■AFCフォーラム 平成30年1月1日発行(毎月1回1日発行)第65巻10号(809号)
■発行／(株)日本政策金融公庫 農林水産事業本部 〒100-0004 東京都千代田区大手町1-9-4 Tel.03(3270)2268
■販売／株式会社 日本経済新聞社 〒105-0003 東京都港区国新橋2-1-2 第一南楼711 Tel.03(3432)2927 ■定価514円 本体価格476円

